

## ブノワ・マロンと「統合的社会主義」

安川 篤子

### はじめに

一八九三年九月、「一八八〇年代を通じて最も著名な独立社会主義者」<sup>(1)</sup> (G・ルフラン)、ブノワ・マロンは、その五二歳の生涯に幕を下ろした。

歴史家C・ヴィラールはマロンの死を「独立社会主義者第一世代の終焉」と位置づけ<sup>(2)</sup> M・ルベリウーはこの九〇年代を指して「社会主義の歴史にとっての新しい時代の幕開け」<sup>(3)</sup>であると定義している。たしかに九〇年代には、フランスの社会主義にとってそれまでとは異なる、新しい動きが見られる。

その第一は、フランス下院への社会主義諸党派の進出である。九三年八月から九月にかけての総選挙では、五〇名近い社会主義者を下院に送り込むことに成功した。そこにはジョ

レスをはじめとする独立社会主義者だけではなく、ゲード派、ブランキ派、アルマーヌ派、ブルース派といった主要な諸党派すべてを見いだすことができる。<sup>(4)</sup>

そして第二に、ジュール・ゲード率いる「マルクス主義」政党、フランス労働党 (Parti ouvrier de France) の躍進である。同党は、選挙基盤を中南部の農村地域へも拡大するに伴い、一八八九年に一、八〇〇人余りであった党員数を、この時期一万人にまで伸ばしている。<sup>(5)</sup>

そしてこれ以降、サンディカリストが独自の路線をとる一方で、自らの活動の場を議会に求めた社会主義者らはゲード、ジョレスといった指導者を軸としながら、次第に小党分立の時代から統一へと歩みを進めることになる。

この九〇年代に彼らがとった戦略こそ、八〇年代にマロンやポール・ブルースといった社会主義者らによって進められてきた「改良主義」である。<sup>(6)</sup> しかしながら、これまでフラン

ス社会運動史に関する研究の中で、八〇年代の「改良主義」について具体的な検討が十分になされてきたとは言いがたい。その背景のひとつとしては、一九六〇年以降本格化した社会主義研究が社会主義を「狭義の社会主義」すなわち一八九六年の第二インターナショナル・ロンドン大会以降の社会主義と捉え<sup>(7)</sup>、マルクス主義を価値基準として捉えてきた傾向が挙げられる。L・ダーフラーは「マルクス主義者が改良主義を追求するようになって初めて、この戦略は社会主義の歴史の中で重要な要素となった」と述べているが<sup>(8)</sup>、このことは反面、当時のフランス社会主義政党が「改良主義」を「公式の」綱領において否定するにともない、社会主義研究においてもその重要性の認識が減少していった過程を示唆しているように思われる。

一方、近年の一九八〇年代を中心として、この傾向への批判のもとに、ブルース、ミルラン、マロンといった「改良主義者」についての研究書が相次いで著される<sup>(9)</sup>。本稿もこれらに負うところは少なくないが、それらが「改良主義」と二〇世紀後半のフランス社会主義とのつながりを強調し、「フランス独自の社会主義の伝統」の中に、彼ら活動家を位置づけるその基調の中には、それぞれの「あるべき」フランス社会主義を前提とした姿勢が、同様に存在してはいないだろうか。

本稿での目的は、ブノワ・マロンという一人の社会主義思想家の問題意識、それに基づく社会改革案を一八八〇年代を中心とした彼の著作と、自ら主幹と発行者をつとめた雑誌『ル

ヴュ・ソシアリスト *La Revue socialiste*<sup>(10)</sup> に彼が執筆した論説にもとめ、「セクトに分裂していたために政治的な影響力を持ち得なかった」とみられてきた八〇年代の社会主義者について、具体例に沿った検討を試みることにある。その際、マロンが用いる「集産主義」、「革命」、「改良」、「モラル」といった諸概念の検討を通じ、彼にとつての「社会主義」とは何を意味するものであったのかを明らかにし、また「改良主義者」としての彼が果たした役割と次世代に向けての影響とを考察したいと思う。そこで本稿では、彼のフランス帰国後の一八八一年から、亡くなる一八九三年までの時期をその対象とするが、そこにいたるまでのマロンの歩みをここで簡単に振り返っておきたい。

一八七一年のパリ・コミュン以前のマロンの幼少年期、青年期についての情報は少ない。一八四一年にロワール県のプレティウーで小作農民の三男として生まれた彼は、幼くして父と死別し、牧童として働くことで家計を助けたが、貧しい少年時代を送っている<sup>(12)</sup>。後にブルムが彼を「労働者のヒーロー」とよぶ所以である<sup>(13)</sup>。生涯独学の徒であり、後に経済学、歴史、政治学といった幅広い知識で知られ、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、イタリア語などにも通じていたマロンが、「読み書きを習い始めたのは二〇代になってから」<sup>(14)</sup>であるという「マロン神話」が生まれたのもこのような生い立ちと関係があるかもしれない。

十代後半に大病を患って療養生活を送った後、マロンは一

八六三年、染色工としてパリ郊外のピュトーにやってくる。

このパリで、彼は労働運動に出会った。旧来の伝統的生産工程を基礎とした労働者の自立的な世界と、労働の場を資本の論理のもとに統制しようとする資本家との対立関係が顕在化するパリでは、労働者は政治問題を生活意識にひきよせ、生活の一部として捉えうる状況にあった。その中でマロンは、はやくも一八六五年一月八日に、フランスにおけるインターナショナル最初の支部が開設された際の創設メンバーの一人に名を連ねている。<sup>(15)</sup>「一八六六年から六七年にかけての労働者団体の設立運動によって、社会主義にのめり込んだのだ」と後に回想しているように<sup>(16)</sup>、そこで彼はE・ヴァランやH・トラン、Z・カメラナ、P・マンク、N・ルメルといった活動家と出会い、「労働者主義」に根ざした活動を繰り広げる。マロンの良き理解者であり、前述の雑誌のパトロンのでもあったロドルフ・シモンによれば、マロンは一八六四年以降、四回のストライキを組織し、八つの労働者協会を設立したといわれている。<sup>(17)</sup>第一インター・フランス支部内にはトランのようにブルードン流の同職組合を奉じる者、ヴァルランのような非権威主義的集産主義者、バクーニンに近いより戦闘的な行動を好む者、V・ジャクラールのようなブランキ派、P・ラファルグのようなマルクス主義者など、様々な考え方が混在していたが、彼らはまた同様に、多くを共有していた。ストライキの頻発や公開集会運動などで労働運動が激化した一八六八年以降、マロンは当局によって数度にわたり逮捕、拘

留されながらも、ヴァルランらとともに最も活発なミリタンの一人として、第一インターナショナルでの活動の中心にいた。

とりわけ一八七〇年九月以降は、マロンが最も活発に政治活動に取り組んだ時期である。彼は十七区のパティニョールをその活動拠点とし、インターナショナル会員として組織設立に奔走する一方、一八七〇年十一月のパリの区長・助役選挙では十七区の助役となり、十七区の救護サービスを担った。また王党派が勝利した一八七一年二月の国民議会選挙でも十七区から当選し、ヴェルサイユ仮講和条約に反対投票をした後辞任するほか、三月におきた民衆の市庁舎占拠の際には、国民衛兵中央委員会と各区長との間の調停に努めている。ここのマロンの活動については評価が分かれるところであるが、概して彼が流血の事態を回避したいと思っていたことは確かである。<sup>(18)</sup>最後に彼らコミューナルの分裂が明らかになった「公安委員会」設置問題では「少数派」として、設置に反対の姿勢をとっている。<sup>(19)</sup>そして、やがてパリは五月二一日、ヴェルサイユ軍の侵入にともなう「血の一週間」をむかえる。彼は十七区のパティニョール攻防戦を組織し、その後五月二二日とその翌日にかけて、F・ビュイッソンやA・オットンらの助けを得て、スイスへと亡命する。このティエール政権によってなされた激しい弾圧の記憶は、彼にブルジョワ政権への憎しみを刻み、長い間マロンを捉えてはなさないものとなった。<sup>(20)</sup>

亡命先のスイスでマロンを待ち受けていたものは、スイスのインター組織である、ロマン連合内での内部闘争であった。マルクスやロンドン総評議会に忠実なジュネーヴやヴォーの地区連合と、バクーニンの影響が強いジュラ、ベルン、ヌーシャテルなどの連合主義的地区連合との対立である。彼は後者の主張に共感を覚えながらも、インターの分裂を避けるべく奔走した。彼は後年、インターが有効に機能しなかった理由を、このマルクスとバクーニンの間の主導権争いにみている。<sup>22</sup> インターの分裂は一八七二年九月に決定的となり、マロンはこの政争に疲れ、イタリアに移る。そして結果的に彼はロンドンの権威主義的な動きからも、連合主義者らの無政府主義的な動きからも、距離を置くにいたるのであった。

## 〔一〕フランス社会主義運動の再生

一八八〇年七月、マロンは特赦によって十年ぶりにフランスに帰国する。コミューンの弾圧により壊滅的打撃を受けたフランス社会主義運動・労働運動は、一八七六年に第一回全国労働者大会が開催されて以来再生を遂げつつあったが、この八〇年代は同時に「セクトの時代」でもあった。ここではマロンが自らの立場を確立してゆく過程で、「集産主義」という社会主義の方向性をどのように捉えていたのか、それを現実の動きの中に位置づけながら見てゆきたいと思う。

この時期における社会主義運動の重要な転換期とされるの

が、一八七九年にマルセイユで開催された第三回全国労働者大会である。<sup>22</sup> この大会では、未来社会の労働者解放の手段について、それまでの協同組合を中心とした主張に代わり、個人的所有が物質的・知的不平等の原因と定義した上で、社会問題解決にむけて土地・地下資源・輸送手段などの集団的所有の必要性が宣言され、同時に、労働者にとつての階級の政治党派、「フランス社会主義労働者政党連合(Fédération des Travailleurs Socialistes de France)」、別名「労働党」が結成された。<sup>23</sup> これがいわゆる「集産主義の勝利」という言葉で表された大会の概要である。

「集産主義の導入」という語は、現在フランスにおいては一般的に、「マルクス主義の導入」と同義で用いられているが、<sup>24</sup> 七九年当時のマルセイユ大会をフランス・マルクス主義者によって進められた「集産主義の勝利」、すなわちマルクス主義が他のイデオロギーに対して勝利をおさめた大会とする見方をめぐっては、これまでも相対立する見解が表明されてきた。<sup>25</sup> 同時代に近い研究者であるA・ゼヴァエスを例にあげてみると、「集産主義」とは「マルクス主義」と同義であり、創設の必要性がうたわれていた労働者階級の政治党派について、「ドイツに存在するのと同様のもの」と位置づけている。<sup>26</sup> これに対してマロンは、「集産主義」をどのように認識していたのだろうか。

マロンはまず第一に、集産主義の起源を一八三五年に匿名で出版されたH・コラン<sup>27</sup>の『社会協約 *Pacte social*』という

パンフレットに求め（用語としては使われていないにせよ）、それ以降十九世紀の集産主義を七つに分類している。第二に、マロンはC・ペクルルの産業集産主義をあげている。<sup>(28)</sup>ペクルルは一八三六年に出版された『商業、産業、農業および普遍的文明の諸利益 *Les intérêts du commerce, de l'industrie, de l'agriculture et de la civilisation en général.*』という著作の中で、自ら生み出した *collectivité* という言葉を用い、信用、鉄道、鉱山、といった諸組織の「共有」を提言している。マロンはこの思想を、一八四六年にルイ・ブランによって提唱されて後、フランス労働者階級の中で支配的なものとなつていったと位置づけている。<sup>(29)</sup>

第三は、（第一）インターナショナル、特に一八六八、六九、七三年の大会で重きを置かれた集産主義である。これは、それまでの諸思想が融合したもので、唯一の直接税であり累進課税である相続税と、信用、鉄道、鉱山、運河、などの補償をともなつた買い戻しを手段としてセザール・ド・ペープによって提唱された。

第四は革命的集産主義。マロンによれば、三番目のインターナショナルの集産主義を単純化し、強調したものにすぎない。この手段となるものは、ブルジョワ階級からの収奪であり、その担い手は立ち上がったプロレタリアートと公権力の指導者である。これを奉ずる理論家にとって、集産主義とは暴力的な社会革命によって実現される共産主義の総体にすぎない。マロンはゲードによって主張されている集産主義をこ

こに分類している。

第五は、マルクス主義的集産主義である。この担い手はドイツのマルクス主義者には「集産主義者」(collectivistes)とよばれ、フランスでは「科学的共産主義者」(communistes scientifiques)とよばれるフランスのマルクス主義者である。集産主義をより普遍性を持ちうるものとして理解している点に、マロンは第四の立場との違いをみている。その特徴は歴史を階級闘争の歴史と捉え、集産主義は資本主義の決定論的進化の帰結であると認識するところにある。この新しい体制は、大産業のメカニズムの中で組織化され規律化されたプロレタリアートが、対立階級から公権力を奪取し、生産諸力を社会化し、階級の廃止へと発展することができたとき実現する。

次に第六は一八七二―一八八〇年にみられた無政府主義的集産主義である。革命的集産主義と同時期のもので、特に、スペイン、イタリア、ジュラ地方のインターナショナル会員に信奉された。革命的集産主義と異なる点は、あらゆる手段によって早急に実現されねばならない革命は、ブルジョワジールの行政的、司法的諸勢力に対してあくまでも破壊的でなくてはならないという点である。自由で自立的な集団やコミュニティが、生産と公益サービスの組織化のために自由に連合されなくてはならない、とするものである。

そして最後が改良主義的集産主義である。マロンによって推進されるのはこのタイプであり、二番目に挙げた「産業集

産主義」と非常に似通っている。ここでは、資本主義的進化というものを十分考慮するものの、新しい段階、すなわち社会主義が機能するまでに、その進化が労働者階級を完全に疲弊させ、産業プロチブル、商業プロチブル、農業プロチブルをプロレタリアート化することが必要とは考えない。補償の形については議論の余地を残すが、国家による信用、鉄道、鉱山、運河に関する組織と製鉄施設の買い戻しならびに、自治体による自治体レベルでの様々な独占、例えば、乗合い馬車、ガス、水、大商店などの買い戻しは、社会化への手段として最も有効性をもつとされる。また累進課税を導入することで財産問題の段階的、平和的解決をもたらすであろうとしている<sup>30</sup>。ただし、それらの組織は国家や自治体によって直接営まれるわけではなく、国や自治体が、産業や公益サービスに関するアソシエーションと契約を結ぶことで担われるのである。

このように、マロンにとっての「集産主義」とは幅広い政治的スタンスにたつものであり、七九年の時点を考えてみれば、第四番目以降に分類される集産主義を奉じる人々すべてが「集産主義者」であった。そこにはマルクス主義と無政府主義が共存し、改良主義的立場も存在する。このような、「集産主義」についての多様性を認識した上で、マロンが思い描く集産主義的社会の特徴を、彼の言葉に従って挙げてみるならば、

- 「一 土地、生産手段等の段階的な共同所有。
- 二 同業者組合的組織、市町村レベルもしくは全国レベ

ルでの、生産と交換の組織。

- 三 労働者がそれぞれに有する、生み出された余剰価値と同等の自由裁量権。

- 四 児童が健全に発達する権利の保証、健全者への労働の保証と、身障者への生存権と保障の確保<sup>31</sup>。

の四つである。ここには「集産主義」とはまずもって経済変革であり、それが達成された社会とは、健全者のみならず社会的弱者に対しても配慮されたものでなくてはならないというマロンの主張が読みとれる。しかしながら、彼はここでその変革を起こす手段やそれを担う主体に関してあえて言及していない。それはこの点についての一般的な共通認識というものが存在していなかったことを示し、マロンも「集産主義者」を規定する際に、「経済変革への志向」という共通項のみを問題にしていることを示している。

次に「集産主義の勝利」についてのマロンの認識はどうであったろうか。マルセイユ大会では一三〇名の代議員のうち六〇名が前述の「集産化」に関する決議に賛成した<sup>32</sup>。しかしマロンの見解は、この「勝利」についてきわめて否定的である。「マルセイユ大会で勝利をおさめた集産主義ではあるが、このように、六つの連合の内、まずもって二つしか組織されなかった。」また「第三回労働者大会(マルセイユ)の勝利にもかかわらず、集産主義はパリの数グループとそれに忠実な数都市に限られてしまったようにみえた。マルセイユで革命的な、非常に狭い基盤の上に打ち立てられた労働党は協同

組合主義者、改良主義者、集産主義者、無政府主義者が互いに口論しあう四つの断片へと分裂してゆき、それは死産であったかのように見なされうる状態にあった<sup>(33)</sup>」とも言っている。「集産主義」を多くの人が同意しうる、大きな枠組みとしていたにもかかわらず、実際には、マルクス主義的定義はおろか、その大きな枠組みにすら一般的承認を得られていなかったというマロンの認識をここに読みとることができる。

地域ごとに際違った差異は、七九年の大会で誕生した「労働党」というものが、ゼヴァエスのいうように中央集権的な政党ではなく、地方の組織が自主性をもった緩い連合体であったことを示している。そこには、はじめから分裂の要因がはらまれていた<sup>(34)</sup>。だが、八〇年以降に顕在化する分裂は、「集産主義」に賛成した集団の中からも生じている<sup>(35)</sup>。分裂の要因をイデオロギー上の差異に限定することはできないが、この時期に集産主義の細部にわたる議論が開始されたことも事実であろう<sup>(36)</sup>。その「細部」のひとつこそ、「ミニマム綱領」をめぐる、選挙についての論争、ひいては、集産主義社会にいたる手段としての「革命」と「改良」の問題である。「二」ではこの綱領とマロンの関わり、また、それにともなうて顕在化した上記の問題についてのマロンの考えを考察したい。

## 〔二〕「集産主義」への道

一八八一年十月、マロンらコミュニケーション関係者が多数出席し

て行われた第五回労働者大会、ランス大会での主要な争点のひとつは、一八八〇年に選挙綱領として起草され、採用されていた通称「ミニマム綱領」を、正式に「党」の綱領として採択するか否かであった。激しい論戦の末、その採択が決まるが、これを契機として社会主義者間のニュアンスの違いが次第に明らかになってゆく。

マルクスによつて起草された前文と、政治プログラム・経済プログラムの二部からなるこの綱領は、一八八〇年十一月のパリ地方選挙を念頭においたものであった。このとき、多様な社会主義勢力をひとつにまとめる必要性を感じていたのは、ゲードもマロンも同様であった。当初、「歴史的、哲学的、経済的な今日の状況の解説」という部分の執筆を願いで、具体的な改革案、とりわけ農業部門の改革案を盛り込むことを主張していたマロンであったが、実際に一八八〇年七月に新聞や雑誌に発表されたものは、それらが大きく割愛されたものであった。マルクスが手がけた前文には、集産的所有が「他とは区別された政治団体として組織されたプロレタリアの革命的行動によつてのみ達成される」ことが宣言され、組織化の手段としての普通選挙権の有効性が明記されている。それに続くゲードとラファルグによつて作成された「政治」の部では、「出版と結社の自由」ならびに「それを禁止する法の撤廃」、「労働手帳の廃止」、「宗教予算の廃止」などが要求され、マルクスとエンゲルスによる「経済」の部では、「月曜休日、もしくはそれにかわる休日」、「成人の一日八時間労働

十四歳未満の児童労働の禁止、十四歳から十八歳までの一日六時間労働」、「間接税の廃止、直接税の累進課税」などが掲げられている<sup>(37)</sup>

これらプログラムの中にみられる、最低賃金法や八時間労働などの要求は、短期的な組織の統一には有効であった。しかし、各新聞、雑誌のプログラムへの解説にも現れているように、ここにはイデオロギー上の一貫性は存在しない。ゲードの『レガリテ L'Egalité』紙は、政治権力の革命的奪取の必要性を表すものとして紹介し、このことがアナーキストを怒らせ、この新聞から手を引かせる結果を惹き起こしたが、一方これに対し、マロンの『ルヴェ・ソシアリスト』誌は、すべての社会主義的労働者の統一の宣言として採り上げ、究極的な目的は、具体的改革に取りかかることを妨げないと解説した<sup>(38)</sup>

このようなゲードとマロンの見解の相違は、一八八一年一月のパリ地区補欠選挙でも際だった。もともと選挙綱領として起草された「ミニマム綱領」であるが、その適用については、それぞれの候補者の判断を容れ、より具体的な改革を示す公約をたてて選挙に臨むことを認める決議が、ルアール大会（一八八〇年十一月）で通過していた。このためJ・ジョフランは、「ミニマム綱領」の前文を否定する立場で選挙運動に臨んだ。その結果、ジョフランの公約を酷評し、「ミニマム綱領」の遵守を主張して統一的な組織化をめざすゲード派と、ジョフランの改良主義的戦略を支持し連合主義的な組織

化をめざすマロンやブルースらの意見は激しく対立することになった<sup>(39)</sup>

「ミニマム綱領」をめぐる論争は、各グループの差異を浮き彫りにする結果となった。北部連合はこれを綱領として認めず、南東部連合ではその一部が否決された<sup>(40)</sup>。これにより、集産主義者らは相互主義者から分離し、アナーキストとの論争は激化する。また、マロンやブルースらとゲード派との確執もここから生じ、互いに相容れないことをますます意識するようになってゆく<sup>(41)</sup>。一八八一年の選挙では、なんとか統一を保てた「労働党」であるが、この「ミニマム綱領」は、統一を維持し続けるための求心力とはなり得なかった。

これまで述べてきた「ミニマム綱領」にまつわる相違の中で、「革命」と「改良」を巡る議論は最も重要なものであった<sup>(42)</sup>。そしてこれは、マロンの生涯を通じて、中核を占めた問題であったともいえる。この二点をめぐるマロンの論理の変遷をたどり、「集産主義」達成に向けての手段に関する、彼の主張を明らかにしたいと思う。

マロンは、早くも一八八〇年十一月に、「地方自治体の獲得」と題した論文の中で、現実的な改革の必要性を強調している。「プロレタリアートとその同盟者たちは、革命的行動によって旧社会を瞬時に変革できるほどの力を有してはいない。そのため、まず即座に手に入れることができる地位を、支配することから始めなくてはならない」<sup>(43)</sup>

しかし、ここで述べられていることは、プロレタリアート



自身の階級としての非力さの認識であり、「革命」それ自体への否定ではない。この時期のマロンの著作をみる限り、彼は執拗に、究極的段階での革命的蜂起の必要性を主張しているようにみえる。マロンが「改良」の必要性を訴えるのはむしろ、それが革命的精神を育み、「革命」の原動力となるからである。この相互補完的観点に立つて、マロンは、「革命」と「改良」とを対立項として捉える革命主義者の意見に異議をとなえている。

マロンはヨーロッパ各国の歴史的経験を振り返り、あまりに貧しく、疲弊した時代や地域においては、人々は反抗の意志を殺がれてきたのに対し、近代革命を最初に起こした国イギリスでは、人々はある種のゆとりを獲得していたと分析する。これを革命主義者の意見に対する反証として掲げ、革命には政治的要因と、心理的要因が存在するとマロンは主張する。<sup>(44)</sup> 政治的要因が経済状況であるなら、心理的要因とは、反乱について考えることを許すゆとりである。革命的精神を生み出すには、原動力となるべき力が必要となる。それは、よりよい未来を思い描き、要求を膨らませる力である。なぜなら、よりよい未来を描けなければ、それと比較した、自己の状況の不当性を認識することはできないし、自らの解放へと駆り立てることもできないからである。このような分析からマロンは「革命的精神は、獲得したゆとりと、手にした改革に比例する」という結論を導く。このための方策として、彼は労働時間の短縮を支持し、「諸改革は、革命の母」と定義す

るのである。<sup>(45)</sup>

また一方で、改革を押し進めることで、革命を不必要なものとする純粋改良主義者に対しても、マロンは異議を唱える。その理由は改革が究極的なところまで進んだとしても、支配階級は自らの特権の破壊には同意しないことが予想されるからである。政治的平等の究極的現出である共和制を得るために、政治革命が必要であつたように、経済的平等を獲得するためには、社会革命が必要となるのである。それゆえマロンにとっては、革命的か、改良的かは問題でない。革命的かつ、改良的でなくてはならないと主張する。<sup>(46)</sup>

しかしながら、ここでいうマロンの「革命」とは、何を指しているのだろうか。先に述べてきたように、マロンの集産主義にむけての究極的な目標は、経済変革に求められる。そして、この変革をもたらすための手段が、彼が言うところの「社会革命」なのである。この「社会革命」の中に政治革命は内包されているのであろうか。マロンは「政治革命」という言葉に二つの意味をみている。ひとつは「政治的諸党派間の抗争」、「人間のすげ替え」としてマロンが認識している「政治闘争」であり、もうひとつは、「二つのサン・バルテルミー」<sup>(47)</sup>とマロンがよぶところに代表されるような「武力闘争」である。マロンによれば、「政治革命」にとって「武力闘争」での勝利とは「政治革命」の成功を意味する。しかし、その勝利も「社会革命」にとつては二義的な一部分にすぎない。逆にいえば、この「社会革命」にむけての「部分的な」成果を、

彼は「武力闘争」の勝利をもたらした「組織」にみているのである。<sup>(48)</sup>

フランスでは、大衆行動による政治権力の倒壊を身近なものと感じさせている革命の伝統によって、革命に対するロマンティズムが長きにわたって存続したといわれている。<sup>(49)</sup>これに対してマロンは、革命を否定しないまでも、武力闘争をも含めた「政治革命」への留保をこのように八〇年代当初から表明している。その第一の理由は、「政治革命」の失敗は、未だの先駆者らの根絶と、旧秩序の維持というとてもない代償をとまうからである。これは、まさしく彼が「フランス・プロレタリアート第三の敗北」とよんだ、一八七一年パリ・コミューンでの経験に基づくものと思われる。「プロレタリアートの三つのサン・バルテルミーは、我々にセンチメンタルな政治を放棄させるに十分である」とマロンはその苦渋に満ちた感情を吐露している。このため、マロンはいわば「政治革命」に勝利するためではなく、暗にそれを避けるための方策として、階級闘争に備えるためのプロレタリアートの組織化を、「改良」の一方策として主張していると思われる。現在の社会秩序を支配している利益対立に応じた、階級の候補者たちを選挙に立て、自治体の権利を勝ち取るという主張も<sup>(51)</sup>この延長線上にあると考えられる。

マロンはこの選挙という手段の採用と並行して、一八八〇年代の半ば以降、次第に、流血の惨事を伴う「革命」に対して彼が抱いている危惧を雄弁に語り始める。

まず第一の危惧は、革命を起こす原動力に關してである。

八〇年代初めの著作にはこれまで述べてきたように、階級意識に根ざし、階級対立を強調する言及が数多く見られる。それは、「階級意識」の欠如が、前述の階級闘争「敗北」の原因のひとつであると考えたからである。<sup>(52)</sup>彼の構図を支配しているのは、階級利益と階級利益の衝突であった。しかし、マロンが呈示した新たな問題とは、この「衝突」の原動力となるものが互いのエゴイズムに他ならないのではないかという疑問である。マロンは「正義」による平和と「エゴイズム」による闘争とを対比させ、今後の流れがどちらに傾くかは支配階級の出方にかかっていると主張する。<sup>(53)</sup>

第二は、革命がもたらす犠牲の大きさである。戦闘を通じて取り返しのつかない膨大な犠牲に加えて、革命の最中とその後の過渡期とを通じた全般的危機的状況がはらむ、反動勢力に好機を与える危険性について彼は警告する。<sup>(54)</sup>苦しさの中から生じた革命であるにもかかわらず、革命後の世界が、すぐさま苦しみは解消されたバラ色の世界になるとは限らない。むしろ必ず、混乱から生ずる失意の念と払った犠牲への懷疑の念が人々を捉える。そこに、反動勢力からつけ込まれ易い最も危険な罠が生じる。その危険性を、革命家は果たして認識しているのだろうかというマロンの問いかけである。

第三は、革命が成功するための環境の問題である。改良主義的方策は常に現実に即しているために時宜を得たものであるのに対し、革命は非常に稀な、ある限られた危機的瞬間で

しか成功しない。

マロンはこのように主張し、自らのあり方を「状況に応じた革命家」ともなりうるが、「通常は改良主義者」であると規定する。そして最終的には「プロレタリアートは普通選挙権を享受することで、革命的行動に訴えなくとも政治組織を変革することができる」という結論に到達する<sup>(55)</sup>。これまで見てきたように、マロンの「革命」と「改良」に関する考えは決して首尾一貫しているものではない。「革命」の必要性を主張しつつも、随所にそれを回避したいとする彼の本音が見え隠れする。八〇年代前半について、「マルクス主義やドイツの思想に幻惑され」、「選んだ戦略を誤った<sup>(56)</sup>」と後に述懐しているほど、マロン自身も、その揺れというものを認識している。

だが、その中で変わらずマロンの姿勢を貫くものがひとつある。それは、二元論的思考方法の否定である。彼は次のように言う。「以下のことを我々は忘れてはならない。すなわち、政治的手段というものは、良くも悪くも時と場所の制約を受ける。つまり自分が置かれた時と周りの状況とを考慮しなくてはならない」と。彼はさらに続けて、時と状況に合わせた戦略が常必要であると主張する。そしてその「状況」の背後に、彼は「歴史」を見ているのである。マロンがフランスに帰国した後、ゲード派との関わりを通じて行き着いた先は、この「フランス独自の歴史」という認識にある。彼は革命の中にフランスの伝統を読みとり、複雑な対立軸をもつ諸々の「革命」の中でも、「階級闘争」という形で顕在化した例とし

て、前述の三つの蜂起を挙げる。そしてマロンによれば、三度ともそれらは労働者の「敗北」に終わった。革命的政策を汲み尽くした帰結が「敗北」であった以上、今後はより改良主義的方向を模索すべきである。その資格がフランス人にはあるとマロンは考える。マロンはこのような過去と現在、そして「より革新的で公正な社会状態」の実現にほかならない未来とを一本の線で結びつける。未来の社会とは何を意味しているのか。「最も人間的で確実な方法」と称した自らの改良主義的なあり方と<sup>(57)</sup>、変化を見せ始めた階級闘争への彼の認識はどのような関係にあるのか。マロンの現状認識と未来への思いを次で述べたいと思う。

### 〔三〕社会的モラル

マロンは現在の状況を「政治的」、「経済的」、「哲学的」危機という言葉で表したが、それら諸問題の全般に関わる中心的問題として彼が重くみたものこそ、「モラル」の問題であった。

「モラル」とは何か。マロンはまず、先人たちが与えた定義を引用し、その歴史の変遷をたどり、彼もその一般化した定義を試みる。「モラルとは何か」、それは、すなわち「善の実践である」。

マロンにとって、「善」や「思いやり」といった感情は、人間が生まれながらに獲得しているものではない。それらの感

情はそれ自身発展の過程にあり、教育の成果なのである。社会の発展は、生物学的運命と生存のための戦いに始まる。これを司っているのはエゴイズムである。つまり、発展の原動力はエゴイズムなのである。しかし、人間は希望を抱き、状況を改善するために、社会関係を結ぼうとする。そして個々人の間に打ち立てられる諸関係は、癡猛なエゴが飼ひ慣らされたときにしか発展しない。ゆえにそのエゴを押さえて、他と社会的関係を結んだときに、相手を思いやる感情、「思いやり」が生じるのである。マロンはこの「エゴ」に歯止めをかける力を「利他主義」とよび、この社会（アソシアシオン）の中で、人と人とを結びつける義務を伴った紐帯を「モラル」と定義づける<sup>(58)</sup>。

先人たちがそれに与えた定義に満足せずに、マロンが新たな解釈を試みる理由は、社会主義を論じる際に、「モラル」という抽象概念がなぜ引き合いに出されるのか、という問題と関わっている。それは何よりもマロンの問題意識が現実政治の中にあり、現実の社会問題を解決するための鍵を「モラル」が握っていると彼が考えたためである。マロンの論説を見てみよう。

「オーギュスト・コントが四〇年前に『嘆かわしい我々のモラルの状況』と言ったところのものは、今なお少しも改善されないでいる。今日、一八四五年と同様に、またさらに差し迫った理由から、我々は次のように言わざるをえない。すべての社会的モラルの崩壊と、政治活動の弱体化——それは

様々な対立集団内での低次元な支配欲につき動かされた闘争によって生じる——が、次第に必然的にこの世界をまやかしと無能に委ねてしまう傾向にある。」

このような状況、このような環境の中で、人々にとっての、とりわけ、社会にとつての悪の諸要因を見いだすことが、「モラル」を考える際の目的なのである。なぜなら、「モラル」を切り口とすることで、社会を掘り下げることができ、また「モラル」自身が社会を発展させることができるからである。逆に言えば、社会が利他的であればあるほど、教育、制度といった現実の社会的事象に現れる「モラル」は高いレベルを指し示すからである<sup>(59)</sup>。

それゆえ、フランス左翼の同時代人からマロンを区別する際の一の特徴が、「モラル」という概念を用いたことである」とされるとき<sup>(60)</sup>、マロンが「モラル」、「善」、「正義」といった抽象的語彙を用いるからといって、それは決して現実からの乖離を意味するものではない。そして彼が一番に挙げる現実の中の悪の要因とは、ハーバート・スペンサーの言葉を借りて、マロンが「原初的モラル」とよぶところの「エゴイズム」であり<sup>(61)</sup>、それこそは本来発展のための本能的衝動であった。

マロンはこの悪の根元をあらゆる悪徳の中に見ている。すなわち、不況、貧困、犯罪が巣くう社会の中に<sup>(62)</sup>、また敵意に満ち、個人的野望と貪欲さが猛威を振るう政治の中に、そしてプロレタリアートと特権階級が互いにそれに火をつけた、階級闘争の中にある<sup>(63)</sup>。

「二」で述べたように、マロンは「正義」による平和と「エゴイズム」による闘争を対比させる。マロンは次のように言う。

「積年の資本家による搾取に対抗して立ち上がったプロレタリアートたちが担うべき、厳しく、暴力的な闘争において、経済闘争が第一の重要性をしめていることは十分に理解できる。しかしながら、集産主義は労働者のすべての要求を満たすものではないのだ」「たしかに人は、階級闘争の利点について、したり顔で口にする。しかし、それだけではないということをおぼえて、階級闘争の原動力となるものを考慮しなくてはならない」<sup>(64)</sup>

「階級闘争の原動力」、それは階級のエゴか、それとも普遍的な人類解放の戦いへの献身なのか。マロンは、これへの明確な返答を避けているように思える。ジョレスの解釈によれば、プロレタリアートのエゴイズムは、社会的幸福と人間の本性とを結びつけることで、このエゴを非個人的エゴイズムに転換する。それによって、プロレタリアートのエゴは、プロレタリアートを消し去ることによる全人類への献身、すなわち他のために自らの存在を消し去るという究極的な寛容に到達する。これは人類のエゴであり、高次のエゴである。これに対して、資本家のエゴは個人的エゴ、低次のエゴであり、決して階級のエゴから人類のエゴには昇華しないと定義する<sup>(65)</sup>。

しかしながら、そもそも階級闘争と「利他主義」とは両立

しうるもののだろうか。マロンが考える「利他主義」の公式はいたってシンプルである。すなわち、社会関係においては正義と団結。個人関係においては誠実さと善意。そして「すべての自分以外の存在」<sup>(66)</sup>「他」との関係においては節度と憐憫である。これらの中に、「闘争」の入り込む余地はあるのだろうか。このような疑問と批判は同時代人からも提起されている。『レル・ヌーベル *L'Ère nouvelle*』<sup>(67)</sup> 誌の主幹であるG・ディアマンディは、自らの誌上でマロンの社会主義に対する批判を行った。これに対し、マロンの協力者であり弟子の一人であったE・フルニエールは、『ルヴェ・ソシアリスト』誌上でディアマンディの主張をとりあげ、反論を試みている。フルニエールの紹介によれば、ディアマンディの主張は、

一・「マロンは社会主義ではなく、ブルジョワ階級に、困窮者と下層民に対しての深遠なる憐憫の情を抱かせようとした。しかし、ブルジョワジーをより良くしようとするのが、社会主義なのだろうか」

二・「マロンのなした仕事は労働者の世界には浸透しなかった。なぜなら、憐憫の情を社会問題の解決策と同じレベルにもってくることで、すべての政治闘争に必要な戦闘性を弱めてしまうからだ」

という二点である。このうち、フルニエールは一についてはマロンが社会主義に引き入れた多くのインテリ・ブルジョワジーがいること、そして二については、マロンは「憐憫」を解決策にはしていないと主張することでこれに反駁している。

フルニエール曰く、たしかにマロンは経済学に人間味を持たせ、社会学的研究に欠くことのできない「正義」という概念を再導入した。そして活動的で戦闘的な「善」——共通の幸福を追求するための刺激剤——を称賛した。だが、この「善」は彼の理論の根底にあるものではなく、彼の人柄の根底にあるものなのだと主張する。<sup>(68)</sup>

しかし前述のディアマンディによる指摘は、マロンの思想の特徴に関しては、的を得たものであると思われる。なぜなら「憐憫」、すなわち先に見た「利他主義」が目的とするものは、「政治闘争」や「戦闘性」ではないからである。

ジョレスやフルニエールは、マロンの「利他主義」と「階級闘争」に整合性を持たせようと苦心した。しかし、「モラル」を論じ、「モラル」を高めることで到達しうるものは別の所にあると思われる。実際マロンは、現在のマルクス主義的定義に従えば、正義、友愛、その他の形而上学的観念は現在の闘争と何の関係もなく、望まれる社会変革が歴史的発展によって必然とされ、現実社会の経済状況によって、その変革が可能なものとなるかどうかを認識することのみが重要となることも述べている。それでは、マロンが「モラル」や、「利他主義」を強く唱導するのはいったい何のためなのか。近代社会主義は、科学と歴史と経済的進化の過程の中にしか見いだせないものなのだろうか。「否」、これがマロンの答である。<sup>(69)</sup>

ジョレスがマロンの「理想主義」とマルクスの「唯物主義」との間には根本的な対立概念は存在せず、提示方法の違いし

かないと言い<sup>(70)</sup> フルニエールがマロンの思想はマルクスの思想の延長線上にあると述べる一方で<sup>(71)</sup> マロンは自らを「社会主義の異端」とよんだ。<sup>(72)</sup> マロンは次の事柄を社会主義の反論しがたい「既知事項」として受容する。すなわち、歴史を支配する階級闘争、労働者の組織に基づく戦略、そして独占による生産諸力の社会化である。しかし、同時に社会生活のすべてを経済の発展過程という殻の中に閉じこめることを否定し、政治的社会は経済的社会の反映にすぎないことにすることに異議を唱える。諸国家の動きを決定するには、宗教的、政治的、経済的現象は互いに関わり合い、絡み合っているのだ。

そして、いまや経済はその唯一の推進力ではないと主張する。<sup>(73)</sup> 改革者はプロレタリアートという階級の利益のみを求めただけで満足してはならない。なぜなら、産業プロレタリアのみが社会主義の担い手ではないからである。彼らはすべての苦悩、戦闘性、希望の論理的代名詞にすぎない。<sup>(74)</sup> 経済だけではない、予測不可能な力、すなわち人間の魂を司っている精神やモラルに関わるすべての力も、同様に考慮に入れねばならない。つまり、その原理において科学的で、目的において人間的な、社会を流れるすべての要因を統合して考えなくてはならないとマロンは主張するのである。

ここから、社会関係と社会状況を改善するためのすべての改良に、同時に参加する必要性が生じる。改善しなくてはならないものとは、家族、教育、女性の解放、哲学の前進、公俗の向上などである。なぜなら、これらの問題とはたんに社

会の問題というだけではなく、「モラル」に関わる問題でもあるからである。<sup>(15)</sup>そして、社会主義の使命とは、これらの問題のなかに巣くうエゴイズムに対抗するとともに、公俗を支配している様々な組織の変革に着手することである。

先に「モラル」とは義務を伴った社会の紐帯であると定義したが、マロンにとっての社会主義の理念は、この義務の部分、すなわち行動基準、行為を生み出すための動機づけを担っている。現在までの行動基準であった個人的利害に対して、正義の上に構築された社会の原理である社会的利害を置き換えることで、マロンの社会主義の究極的な目的は、組織を改革することから、やがて人間それ自身の改革へと向かうことになる。<sup>(16)</sup>

### むすび

マロン自身にとって、多くの同時代人同様、「進歩」は「科学」であった。そのため、マルクス主義の「歴史的必然」を既知事項として受容し、社会主義への流れも時代の趨勢として認識していた。<sup>(17)</sup>ここには、一方で歴史の発展に疑念を挟まない、樂觀的な姿勢が感じられる。

しかし、他方で、経済の領域に限定されがちなマルクス主義のあり方と、分裂を繰り返す当時の社会主義運動の排他性に、ある種の閉塞観を覚えていたことも事実である。彼は一八八五年に政治の場を離れ、自由な論壇とすべく、雑誌『ル

ヴュ・ソシアリスト』を自ら再刊する。<sup>(18)</sup>彼は当時の空気を「グループの法としての排他主義が、教会の狂信主義のようにはびこり、精神の怠惰な盲従が共通の決まりとなっている」という言葉で表している。マロンにとっての社会主義とはまさに、学理である前に、日々の生活をより良くするための運動であり、彼はその「観察者」であった。それゆえ、人類の苦悩は経済的領域だけにとどまらないという確信を得たとき、「社会主義とは人間のすべての進歩的活動の統合的帰結である」という結論が導かれるのである。<sup>(19)</sup>

マロンは、本稿でこれまで見てきたような自身の社会主義を、「統合的社会主義」(socialisme intégral)とよぶ。彼は社会主義者に課せられた第一の義務として、「理想主義的もや」の中から社会主義を取り出すことを挙げる。と同時に、「情念的衝動」と「哲学的、友愛の息吹」を、宗教的で神秘的な非合理性に通じる観念的理想主義への反発によって、現代の社会主義から切り取られてしまった翼に例え、これこそは社会主義の強さの一部分であったと主張する。<sup>(20)</sup>一見矛盾するよう感じる論旨であるが、実はここに、マロンの論の核心があるように思われる。つまり、科学的な視点であるはずの「進歩」の概念それ自体が、希望や意志といった人間の発展への信仰を原動力としているというこの認識である。マロンは、人を偉大な行動の行為者たらしめるもの、また社会主義を作り上げるものは、人間の本質と関わっており、人間を突き動かすものは第一に情念であると主張した。マロンの思

想は当時、一方で「理想主義的」という諷りを招きうるものであったかもしれないが、二〇世紀後半に生じた社会主義評價の激変を想起するとき、「義務」と「情念」の軽視が「マルクス主義の見落とした点」であるとするこのマロンの主張は<sup>(81)</sup>顧みるべきある種の重要性を持つているように思われる。

マロンの描く理想の社会、それは正義の上に構築された社会であった。「正義」とは経済的公正であり、かつ社会的公正でもあった。しかし、マロンによればこの正義というものは、個々人によって異なるものであるために、ここに「モラル」を育てる必要性が生じてくる。この社会の紐帯となるものがすなわち「社会的モラル」であり、社会主義が「普遍的共感」<sup>(82)</sup>をよびおこす普遍的な価値基準となることを望んだのである。マロンの階級闘争についての留保の後には、ミリタンの不屈の情熱についての言及が続く。しかしミリタンが献身すべきは、もはやプロレタリアートのみではない<sup>(83)</sup>。マロンが例示した、彼らが身を捧げるべき最も崇高なものとは、「自由」、「社会正義」、そして「祖国」であった<sup>(84)</sup>。このように「人間の変革」から、「祖国」へといたるマロンの思想の発展は、国家との関わりでいえば、G・ルフランや、M・ペローが指摘するように、「共和制伝統への順応」<sup>(85)</sup>、「急進派との混合」<sup>(86)</sup>、という社会主義者が体制内に組み込まれてゆく過程を、マロン自身が示しているものと捉えることもできる。たしかに、マロンは議会制民主主義というものに信頼を寄せている。彼は第三共和制に対して、ときには共和主義の理想を裏切るものであると

いうことを示唆しながらも、社会主義的改革を最も望める体制であり、ブーランジスムのような「まやかし」から共和国を守らなくてはならないことを表明していた<sup>(87)</sup>。次世代の独立社会主義者の中にも、議会を舞台にした民主主義への信頼は跡づけることができる。ジョレスは、マロンが民主主義に対して、また、民主主義のために「モラル」を呈示したことに、大きな意義を見いだしている<sup>(88)</sup>。マロンはこのような「社会的正義」に基づく社会においてこそ、利他的社会、すなわち実現された社会主義の世界が到来すると定義する。

このように、手段としての議会制民主主義に信頼を寄せたマロンであったが、彼の民主主義それ自身への信頼は、決して「制度」にとどまるものではない。だからこそ、マロンの力点は、あくまでもそれを作り上げる「人間」に置かれる。民主主義とは、政治家、社会主義者、そして人間それぞれの「モラル」なくしては立ちゆかないことをマロンは認識していた。彼は九三年秋の、社会主義者の国民議会への大量進出も、その後の政界、知識人すべてを巻き込んだドレフュス事件も見ることなくこの世を去った。にもかかわらず、先にみた決定論的「社会主義・共産主義」への警告とともに、二〇世紀に社会民主主義がたどった運命への洞察をも、彼の「統合的社会主義」から読みとることができないのではないかと思われるのである。



- (1) G. Lefranc, *Le mouvement socialiste sous la Troisième République*, Paris, 1963, p. 83.
- (2) C. Willard, *Socialisme et communisme français*, Paris, 1969, p. 72.
- (3) M. Reberieux, "Le socialisme français", dans J. Droz (éd.), *Histoire générale du socialisme*, Paris, 1972, p. 171.
- (4) A. Zévaès, *Histoire du socialisme et du communisme en France de 1871 à 1947*, Paris, 1947, pp. 236-237.
- (5) C. Willard, *Le mouvement socialiste en France (1893-1905) : les guesdistes*, Paris, 1965, p. 82.
- (6) D. Stafford, *From Anarchism to Reformism : A Study of the Political Activities of Paul Brousse with the International and the French Socialist Movement 1870-1890*, London, 1971, p. 6.
- (7) M. Reberieux, "Préface" de J. Howorth, *Edouard Vaillant : la création de l'unité socialiste en France*, Paris, 1982, p. 14.
- (8) L. Derfler, "Reformism and Jules Guesde 1891-1904", *International Review of Social History*, **XII**, 1967, p. 78.
- (9) D. Stafford, *op. cit.*; L. Derfler, *Alexandre Millerand, the Socialist Years*, The Hague, 1977; K. S. Vincent, *Between Marxism and Anarchism : Benoit Malon and French Reformist Socialism*, Los Angeles, Berkeley, 1986.
- (10) 一八八五年に再刊した月刊誌『ルヴェ・ソシアリス  
ム *La Revue socialiste*』第二シリーズ（一八八五—一九  
一四）°プロンがなすまでの九年間に、約五五〇本  
の署名論文が掲載され、その内八九本もの論文をマロ  
ン自身が執筆している。
- (11) M. Reberieux, "Le socialisme français", p. 137.
- (12) B. Malon, "Fragment de mémoires", *La Revue socialiste*, jan. 1907, pp. 4-8
- (13) L. Blum, "Préface" de F. Simon, *Une Belle figure*, p. 5.
- (14) *Ibid.* p. 6. cf. B. Malon, "Fragment de mémoires", *La Revue socialiste*, 1907, p. 16.
- (15) Z. Camélinat, "La mort de Benoit Malon", *La Revue socialiste*, 1893, p. 404.
- (16) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 2, 1891, pp. 29-30.
- (17) R. Simon, "La mort de Benoit Malon", *La Revue socialiste*, 1893, p. 387.
- (18) cf. K. S. Vincent, *op. cit.*, pp. 27-31.
- (19) cf. B. Malon, *La Troisième défaite du prolétariat français*, Neuchâtel, 1871, pp. 268-269.

- (20) B. Malon, "Le programme de 1880", *La Revue socialiste*, 1887, p. 40.
- (21) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, Paris, 1890, pp. 187-188.
- (22) R. D. Anderson, *France, 1870-1914: Politics and Society*, London, 1977, p. 123.
- (23) *Séances du Congrès ouvrier socialiste de France. 3<sup>e</sup> session tenue à Marseille du 20 au 31 octobre 1879 à la salle des Folies-Bergère*, Marseille, 1979, pp. 716-717.
- (24) M. Reberieux, "Le socialisme français", p. 151.
- (25) K. S. Vincent, *op. cit.*, pp. 74-75. ユーゲンヤントはアインダーソンらの意見に対し、「集産主義」という語のもつあいまいさと、七十九年時に「集産主義者」の側になったグループの多様性を考えればこの時点を新しい時代の幕開けと見るのは過大評価であろうとしている。
- (26) A. Zévaès, *op. cit.*, p. 87.
- (27) Hippolite Colins (1783-1859) 知的、物質的双方の貧困に終止符を打つため、土地の国有化を求める数冊の著作がある。
- (28) Constantin Pecquer サン・シモン主義者。一八〇二年にサン・シモンが個人主義に対する語として用いた「collectisme」から発想を得る。諸個人は土地の一時的な所有者にすぎないと主張。
- (29) マロンはペクールからルイ・ブランにいたるシステムが、「集産主義」とはみなされない理由を、彼らの時代には依然その語が存在せず、その後も一八六七年にド・ペープが第一インターナショナルで用いるまで一般的でなかったことにみている。B. Malon, "Collectivism et socialisme", *La Revue socialiste*, 1887, p. 339.
- (30) *Ibid.*, pp. 338-341.
- (31) *Ibid.*, p. 342.
- (32) M. Perrot et A. Kriegel, *Le Socialisme français et le pouvoir*, 1966, Paris, p. 17. 上の決議の票数に関して、七三対二七という数値を使っている研究書もある。cf. D. Ligou, *Histoire du socialisme en France, 1871-1961*, Paris, 1962, p. 35.
- (33) B. Malon, "Le programme de 1880", *La Revue socialiste*, 1887, pp. 39-41. パリを中心とする「中部地区連合」と「東部地区連合」の二者。
- (34) 「北部は改良主義的、南西部は協同組合主義的であった」「南部はアナキストが強く、中部もアナキストによって無力化した状態であった。なぜならマルセイユ大会もアナキストの熱心な協力がなかったら集産主義が勝つことはできなかったから」(*ibid.*, pp. 40-41.)
- (35) 「ミニムム綱領」を巡ってのアナキストの分裂(八〇年)、ブランキ派(八一年)、ブルース派(八二年)の分裂。
- (36) ゲード派とブルース派の分裂の要因については、ゲー

ドのワシントンな姿勢に対する感情的なもつれが指摘される。A. Orry, *Les Socialistes Indépendants*, Paris, 1911, p. 7. cf. A. Zévaès, *op. cit.*, p. 122. 「分裂は政治的キャリアに関心のあるブルースによって仕組まれたもの。自分を二義的な地位にしか置こうとしないゲードやラファルグやドゥヴィューを許そうとはしなかった」

(37) "Programme électoral des Travailleurs socialistes", *La Revue socialiste*, 1880, cit. in Stafford, *op. cit.*, pp. 273-274.

(38) B. Malon, "Le programme de 1880", pp. 48-50. 以下の『ルヴェ・ソシアリスト』誌とは、一八八〇年一月から九月まで刊行された第一シリーズをむす。

(39) K. S. Vincent, *op. cit.*, p. 84.; D. Stafford, *op. cit.*, pp. 168-178.

(40) 一八八〇年八月のマルセイユとリヨンでの地方大会を指す。K. S. Vincent, *op. cit.*, p. 80.

(41) 一八八一年十二月一〇日付、フルニエールへの手紙。「中央集権主義者らはいつも、地区連合を閉息させる。そして彼らにありがちな、不誠実な態度をもって、全国委員会を取り仕切る」"Lettre à Fournière", *La Revue socialiste*, 1908, pp. 232-233. 一八八一年十月から十二月にかけての某日、日付なしフルニエールへの手紙。「(論戦の手段の) 土台である『プロレテール *Le Proletaire*』紙上での反駁が、功を奏さないのであれば、それは思想

的対立ではなく、個人的対立であるといえるであらう。」

"Lettre à Fournière", *La Revue socialiste*, 1907, p. 485.

(42) ブランキ派やゲード派は革命を不可避であり、差し迫ったものとして認識していたが、その具体像は描けておらず、暴力についての概念も曖昧なままであった。M. Perrot et A. Kriegel, *op. cit.*, pp. 25-28.

(43) "The Conquest of Municipalities", *L'Emancipation*, le 6 Nov. 1880, cit. in Vincent, *op. cit.*, p. 83.

(44) B. Malon, *Le Nouveau parti*, vol. 1, Paris, 1882 (1<sup>re</sup> édition, 1881), pp. 75-77.

(45) *Ibid.*, pp. 77, 89. 引用は p. 77.

(46) *Ibid.*, p. 79.

(47) *Ibid.*, p. 81. 「三つのサン・バルテルミー」とは一八三一年リヨン蜂起、四八年六月蜂起、七一年パリ・コミューンをむす。

(48) *Ibid.*, p. 80.

(49) 谷川稔『フランス社会運動史』山川出版社、一九八三年、一〇三ページ。

(50) B. Malon, *Le Nouveau parti*, pp. 80-81.

(51) *Ibid.*, p. 5.

(52) *Ibid.*, p. 2.

(53) B. Malon, "Collectivisme et socialisme", p. 341.

(54) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, Paris, 1892 (1<sup>re</sup> éd., 1891), vol. 2, XVI-XVII.

- (55) B. Malon, *Précis historique, théorique et pratique du socialisme*, Paris, 1892, p. 167. (三十一) *Précis du socialisme* (三十一)
- (56) B. Malon, "Le programme de 1880", pp. 46-47.
- (57) B. Malon, *Précis du socialisme*, pp. 165-167. (三十二) p. 167.
- (58) B. Malon, *La Morale sociale*, pp. 4-22.
- (59) *Ibid.*, pp. 5-6. 「」 (三十三) p. 5.
- (60) K. S. Vincent, *op. cit.*, p. 128.
- (61) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, p. 248.
- (62) *Ibid.*, p. 244.
- (63) B. Malon, *La Morale sociale*, pp. 5-6.
- (64) B. Malon, *Précis du socialisme*, pp. 177-186.
- (65) J. Jaurès, "Préface" de B. Malon, *La Morale sociale*, Paris, 1893 (1<sup>re</sup> éd., 1886), III-IV.
- (66) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, p. 250.
- (67) ルーマニア人の学者 G・ディアマンディ Diamandy は一八九〇年に創刊される。マルクス主義的色彩をその基調とするが、ラファエル・カウニキーといった多彩な寄稿者を含む。Ch. Prochasson, "Jaurès et les revues", dans M. Reberieux et G. Candar (eds.), *Jaurès et les intellectuels*, Paris, 1994, p. 120.
- (68) E. Fournière, "Benoît Malon et le marxisme", *La Revue socialiste*, 1893, pp. 541-543.
- (69) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, p. 171.
- (70) J. Jaurès, *op. cit.*, XIII-XX.
- (71) E. Fournière, *op. cit.*, p. 542.
- (72) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, p. 201.
- (73) *Ibid.*, pp. 202-203.
- (74) *Ibid.*, p. 28.
- (75) *Ibid.*, p. 203.
- (76) *Ibid.*, pp. 244-245.
- (77) *Ibid.*, p. 209.
- (78) フロンは再刊にあたって、この雑誌を「社会主義者の開かれた集いの場」として機能させるべく抱負を語っている。B. Malon, "Entrée en ligne", *La Revue socialiste*, 1885, pp. 2-3. フロンの論文寄稿者と通信欄寄稿者がある党派にのみ偏ったものでないことが、フロンのこの目標はある程度達成されていたものと捉えることができる。この点については、他日論文とする予定である。
- (79) B. Malon, *Le Socialisme intégral*, vol. 1, p. 19.
- (80) *Ibid.*, pp. 17-18, p. 26. (引用) p. 26.
- (81) *Ibid.*, pp. 28-43. (引用) p. 43.
- (82) *Ibid.*, p. 250.
- (83) cf. K. S. Vincent, *op. cit.*, p. 110. 「フロンが上層階級に『利他主義』発展への希望をこめてぶつけた。」
- (84) B. Malon, *Précis du socialisme*, p. 187.

- (85) G. Lefranc, *op. cit.*, pp. 89-95.
- (86) M. Perrot et A. Kriegel, *op. cit.*, pp. 31-32.
- (87) B. Malon et G. Rouanet, "Physiologie du Boulangisme", *La Revue socialiste*, 1888, pp. 507-521.
- (88) J. Jaurès, *op. cit.*, II.

なお、本文中では特に注記していないが、以下の諸氏の研究書から多くの教示をうけ、啓発されたことを付記しておく。  
木下賢一「第二帝政下におけるパリの労働者階級について」、

『社会運動史』5、一九七五年。

喜安朗『革命的サンディカリズム——パリ・コミューン以後の行動的少数派』、河出書房新社、一九七二年。

同『民衆運動と社会主義——ヨーロッパ現代史研究への一視角』、勁草書房、一九七七年。

相良匡俊「一八九〇年代のフランス社会主義運動——第六区革命的社会主义連合——」、『社会運動史』4、一九七四年。

中野隆生「フランス第二帝政期の労働者とその運動」、『社会運動史』6、一九七七年。

福井憲彦『「新しい歴史学」とは何か』、日本エディタースクール出版部、一九八七年。